

加藤典洋さんと初めて話をしたときのことを、書いてみる。
一九八六年の秋。

「なにかコーティングされてるみたいだね、あなたの書くものは」と加藤さんは私に言った。「表面がつるつるでね、弾くんですよ」。

『アメリカの影』以来、売れっ子になって書きまくっていた加藤さんに比べ、私は前年に本を出したばかり。けなされたのか褒められたのか、煙に巻かれた感じのまま、いつのまにか批評の文体をめぐる話題になった。加藤さんは、自分が文章を書く秘密のようなことを、

たしかミミズにたとえて、やんちゃな表情で話し続けた。
残念なことに、詳しいなかみはまったく覚えていない。

以下は、『ホーロー質』を今回読み返しての、私の想像である。

『天皇崩御』の図像学 加藤典洋著 1版

ひとの言葉はどこから出てくるのか。

言葉には、感情や信念や理性といったものがこめられている。

思想の言葉をのべる場合には、このうち、信念や理性が大きな役割を果たす。感情はめいめいのものでも、信念や理性なら人びとが共有できる。思想もそれらにもとづく以上、多くの人びとに共有できるものになるう。

ところがこの結果、思想は、ともすればコチコチの教条に固まってしまふ。

信念は、規範や神や信条など、なにか根拠となる、譲ることのできない前提にもとづいてい。理性は、信念よりも柔軟にみえるけれども、実際に理性がはたらくためには、同じく公理や概念などの堅固な前提から出発する必要がある。結局、信念や理性が組み立てる思想は、結晶のような、形式的な言葉のシステムに固まっていく。

だからこそいい、と考える人びとがいる。

言葉を手に入れるもつとも簡単なやり方は、出来あいの言葉のシステムにとびつくことだ。加藤さんや私が大学に入った当時、誰もが言葉で武装しようとし、いたるところで出来あいの言葉が配給されていた。それに手をのばせば、つぎの日から言葉に困らなくてよくなった。

この結果、スターリン主義の集団もそれに反対する集団も、教条的な言葉のシステムのもとに、いともやすやすと信じられないほどの人数を集めていた。

加藤さんは、こんな器用なことができなかった。

加藤さんは、出来あいの言葉でまあいいやと思うには、言葉に対する感受性が細やかすぎたと言つてもいい。いずれにせよ加藤さんは、誰もが言葉をふりかざしてあわただしく駆け回る時代を、下宿で寝て過ごした。

加藤さんの批評の文体は、この時代に身につけた思考のスタイルと関係が深いのではないかと、私は思う。そのスタイルとは、こんな具合である。

加藤さんは、あわただしく駆け回る人びとにあまり踏み荒らされていない、けれども、なんとなく気になる場所にまず目をつける。

ちよつと考えたあと加藤さんはその場所に、ながながと寝そべるようにごろんと身を横たえる。地面がでこぼこなら、でこぼこなように。草や湿気や小石があるなら、その感触をたつぷり味わいながら。そうやって気のすむまで、寝そべっている。

見上げると青い空には、時代の言説が雲のかたまりのように、ひとつまたひとつと過ぎていくのが見える。それをぼかんと眺めたまま、ただ横たわっている。

ずいぶん時間がたつ。するとそのうち、あちこちがむずむずしてくる。地面としつくりくるところ。どうしても居心地の悪いところ。そんな全身の皮膚感覚に、細心の注意を払う。それからやつと、そろそろと体の一部を持ち上げて、ちよつとだけ姿勢を変える。位置をずらすときには、地面とふれあう皮膚の一部を支点とし、そうでない部分を地面からひき剥がすようにする。またすこし休む。

姿勢が変わると、また違った皮膚感覚がやってくる。それにまた神経を集中する。またむずむずしてくる。そこでまた、体を少し動かしてみる。こんどは、さつき動かさなかつたところを持ち上げる。

こんなことをもぞもぞと繰り返しているうちに、気がつくつと、もとの場所からだいたい動いて、ひとつの方向性ができあがっている。そこでこの、ミミズにも似た動きを、言葉に置き換えてみる。空を流れる雲とは無関係だが、誰もが確実にあとをついて行くことのできる言葉の系列がぶつぶつと吐き出されていく。

そんなふうに、加藤典洋さんの批評は紡ぎ出されるのだと、私は勝手に思っている。

加藤さんの文章は、あまり誰も目にとめないちよつとしたエピソードのようなどころから始まる場合が多い。いつ本筋が始まるのかと思っていると、実はそこが本筋なので、読者は意表を衝かれた感じになる。加藤さんのほうは奇をてらつていゝのでなく、ミミズのようにもぞもぞしただけなのであろう。

加藤さんの思考の筋道には、いつも新鮮な驚きがある。そして、いろは坂をくねくね上がつていくみたいなタイプの疾走感を味わうことができる。微細な感受性と試行錯誤のあとを、コマ落としの映画のようになどつていくのである。

このやり方は、まず第一に、教条的な思考のシステムからもつとも遠い。スターリン主義から遠いだけでなく、ポスト・モダンや新保守主義や、どんな思想の意匠とも無縁である。なぜならそれは、特定の前提を立ててそこから言えることを言うのでなしに、どんな前提や論理がよいか、いろいろとりかえながら、試行錯誤する身のこなしだからだ。

第二に、それは頑固で、強靱である。なぜならそれは、特定のパススペクティブをまず前提にするのでなしに、ミミズのように目をなくして、皮膚で感じることに、疑いようのないことだけをよりすぐることだからだ。

加藤さんのダンディズムは、ミミズになつてのたくり回つていゝ姿を、読者にさらすこと

を好まない。それでも文章の不思議なつながりのあいだから、さきほどまで身を横たえていた体温のぬくもりが伝わってくるのが、加藤さんの文体の特徴である。

私が初めて口をきいた、一九八六年の加藤さんは、そんな文体を操る批評家になりおおせていた。それ以来加藤さんは、私にとって、ずっと気になる人であり続けている。

一九九九年には天皇をめぐつて、加藤さんと私はバトル討論をすることになり、翌年に『天皇の戦争責任』（怪書房）として出版された。私は加藤さんの手の内を読もうとし、まだほんの一部分しかわかつていない。いつたい加藤さんがどうやってミミズに変身できるのか、私はいまもって理解できないままである。

*

加藤さんで、変わったことと言えば、書き始めた当初から、すくなくとも本書に収められた一九九〇年前後の文章までは、すべて「ぼく」といつていたのに、いつのまにか「わたし」というようになったことである。

「ぼく」を使うなら使うで、「わたし」を使うなら使うで、加藤さんはそうとう長いあいだ考えたはずである。本人に聞けば、いや、そんなに考えてないですよ、などと言うかもしれないが、まったくあてにならない。私には、加藤さんがなにか考えていないところなど、ま

ったく想像できない。ただ地面に寝ころんでいゝだけで、もつとも本質的なことを考えてしまふような特技の持ち主なのだから。

「ぼく」→「わたし」への移行には、ゆるやかな数十年にわたる、時代の変化が関わつていゝ。加藤さんの語り口には、「ぼく」が似合ったが、いつのまにかミミズは、最初のしつとり湿つた場所から、だいぶ陽当たりのよい場所に移動してきたのだ。「わたし」ということでかえつて意識される公共性を、加藤さんは相当気にするようになったのだ。

本書の元となつた単行本『ホーロー質』（一九九一年）は、『敗戦後論』（一九九七年）を画期として、『可能性としての戦後以後』『日本の無思想』『戦後的思考』（以上、一九九九年）、『日本人の自画像』（二〇〇〇年）をつぎつぎ世に問うようになるまでの、移行的な仕事であるように、なんとなく私には思える。《死んだら、ちゃんと……残るだろうか。心配だ。》（『ホーロー質』あとがき）というのは、ますます本質的な仕事のほうへと突き進んでいく途中での、もの書き加藤さんの正直な叫びのように思われる。

「ホーロー質」は、水を弾くのではなしに、むしろ水を吸収してしまう「ミミズ的」な加藤さんの体質を象徴する名称だ。だからこそ《ほとんどの人に反対され》ても押し切つたほどの、こだわりの書名なのだが、加藤さんに聞けば、にやつと笑つて、いや、そんなことは

ないですよ、と答えることだろう。

（はしづめだいさぶろう／社会学）

*加藤典洋さんの文体の秘密については、瀬尾育生さんの「はしまりの加藤典洋」（加藤典洋『日本風景論』講談社文芸文庫版解説、二〇〇〇年）もぜひ参照されたい。